

【2015/8/16 経済学部ワークショップの様相】

《近代滋賀県の産業発展と地域文化並びに女性の活動》

## 「近江商人の内助」にみる女性の生活・労働・人生 ―坂田郡を中心に

佐々木哲也（株式会社たねや）

本報告の各論点は以下の通り。①『近江商人の内助 湖国名婦伝』から、坂田郡分を抽出し同書掲載理由等を検討、②『近江商人の内助』以外の人物掲載誌（『坂田郡志』『近江長浜町志』『近江人物志』）の検討と引用確認（典拠検討）、③坂田郡女性の社会事業参加。

①、『近江商人の内助 湖国名婦傳』（昭和10年刊）は、淡海高等女学校長渡邊千治郎と水口高等女学校長太田誠一郎の共著で、本研究会ですでに数回テキストとして検討対象に挙げたものである。今回は坂田郡（長浜市を含む）を中心に、その関連人物を検討した。10名の掲載者中、大半は近世～幕末期でいわゆる奉公精勤、親孝養・子女養育に対する藩主の褒章で、儒教に基づくパターン化された孝行顕彰的色彩が強い。ただ実業家で知られる下郷伝平（初代）の妻である「下郷みつ」（嘉永5～昭和9年「貞淑温雅の風」との表現）など数例は近代の人物で、家業精勤・子女養育の描写にもより具体性が盛り込まれている。また「巖佐由子」をはじめ歌人3名（湖国名婦伝中）の掲載選定から、女流歌人ネットワークの検討が必要とのアドバイスを、当会参加者より得た。

②、『近江商人の内助』以外の坂田郡関連文献を点検した。『坂田郡志』『近江長浜町志』『近江人物志』を紐解いたが、先に触れた『近江商人の内助』掲載の10名中6名が『坂田郡志』（滋賀県坂田郡役所、大正2年刊）からの再録であった。『坂田郡志』には、このほかにも十名近い女性の名が挙げられているが、いずれも近世期の藩主褒章事例（親孝養）であった。ただ同書には財界で活躍した「浅見又蔵（初代）」項中にかなりの分量でその妻「静子」の事績が見て取れ、男性項目の点検もなお必要との感触を得た。なお『近江長浜町志』や『近江人物志』も、ほぼそのまま「静子」の記述を踏襲している。これらのソースは、『浅見又蔵伝』（中追岩次郎編、明治35年刊）と思われる。一方、『近江商人の内助』には「静子」について未収録である。

③、浅見静子は、社会事業への貢献度が高く、とくに赤十字社への援助が夫又蔵とともに特筆される。『浅見又蔵伝』には、夫に引けを取らないその援助姿勢が繰り返し記述されている。また坂田郡では、各種救済団体として坂田郡婦人慈善会が明治36年に結成されているが、そこには下郷・浅見両家関わっている。発起人の一人である下郷妙は2代伝平（久成、明治5年生まれ）の妻で、明治9年生まれ。大阪初の女学校でキリスト教主義教育を建学に掲げた大阪梅花女学校卒という。なお、妙の父千葉貞幹は大分県ついで長野県

知事を歴任。大津地方裁判所長在任中に大津事件を担当。内閣の圧力に抗し司法の独立に貢献したことで知られる。下郷家による下郷共済会の各種事業は著名であるが、その背景の一端が垣間見れる。加えて坂田郡婦人慈善会は保育園事業（長浜愛児園）も展開していた。今後は、社会事業に加え医療関連もその射程に加え、さらなる文献渉猟に勤めたい。

（佐々木哲也）